

発行：日大土木会広報部会

〒101-8308
東京都千代田区神田駿河台1-8
日本大学理工学部土木工学科内
TEL：03-3259-0662
FAX：03-3293-3319
http://nichidai-dobokukai.com/
info@nichidai-dobokukai.com

日大土木会会報

会長挨拶

「日大土木会の皆様へ」

会長 一場 駿

会員の皆様におかれましては、平素より日大土木会にご支援ご協力をいただき誠にありがとうございますとございます。厚く御礼申し上げます。

先般、本学前理事長、元理事らによる一連の不祥事の再発防止策として、七月に学外人材から次期理事長を登用する新体制を始動させるなどのガバナンス改革が報告されました。信頼を取り戻すには相当の時間と努力が必要であると思いますが、日本大学の再生に期待したいものです。



一場 駿 会長

さて、令和二年一月よりのコロナ禍ではありますが、医療従事者の皆様のご努力、ワクチンの普及、そして治療薬の開発と「三」コロナの時期に入ってきているとは言え、まだまだ感染対策を十分にしながら諸活動を行う状況であります。

このような中、先日、会長・副会長会議を開催し、「三」コロナにおける総会のあり方を検討いたしました。今後の感染状況にもよりますが、まず、理事会を面審議で開催し、その審議内容を郵送で配布、そしてリモートと対面のハイブリッド型の総会を開催して郵送で決議を行うものであります。遠方の会員皆様の参加など、むしろ未来型の総会としてより活性化するのはないかと考えてお

ります。今年をテストケースとし、次年度以降は修正を加えてより合理的で活性化する方法を模索してまいりたいと考えております。

過去には2000名超の会員が令和三年度末現在では1133名、会費納入者159名にとどまっております。また入会者2名、退会者13名、死亡者7名と衰退の一途をたどっており、会の今後の行く末を考える時期に来ているのだと思います。

会を活性化するためには若い会員を増やす、このためにも会の運営方法を検討することが必須となります。

手始めに、今年特別講演会等をZOOM（ズーム）で配信いたしますので、ぜひ職場などで非会員の若い卒業生の皆様に視聴を勧め、日大本系3学部4学科の学生、教職員、OBの交流のプラットフォームとしての日大土木会の魅力を感じて戴き、会員の拡大そして継続した活動に繋がってまいりたいと思っております。

日本大学には全学で相当の会が存在いたします、それぞれが活性化し発展することが、日本大学の名誉回復の一助となると信じております。

最後になりますが、会員各位の本会への引き続きのご指導ご協力をお願いし会長挨拶とさせていただきます。

本年度の総会は 書面審議で開催

総会（一部）特別講演会 対面・オンラインでも

会長からの挨拶にありまして通り、令和四年度の通常総会は昨年引き続き、新型コロナウイルスの感染予防のため書面審議での開催となります。

しかしながら、本年は本会の活性化のために、来る七月二十三日（土）に、駿河台校舎にて対面式での総会（議案説明等）及び特別講演会を開催することになりました。（日時や講演会の詳細情報は総会開催案内参照）

郵送で送付しました総会案内に同封された「総会議案書」に審議いただきたい内容が記されております。

第一号議案・「令和三年度収支決算・事業報告」、第二号議案「令和四年度の活動計画」、第三号議案・「令和四年度予算案」、が審議して

いただく議案となっております。

審議方法は、同封のはがきにて各議案ごとに賛・否に〇印を付けていただきます。ご意見記入欄もありませんので記入いただくことができます。なお、総会の審議につきましては、七月末日までにまでに投函されたはがきで賛否の数を集計いたします。そして有効返信数の過半数を持つて承認とさせていただきます。

また、皆様からいただいたご意見につきましても役員会等でその対応を審議する予定にしております、次号の会報でその審議結果をお知らせする予定です。

変則的な総会開催になりますが、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

澤野利章先生 生産工学部 学部長に就任



澤野利章先生・生産工学部長に就任

令和四年二月に生産工学部土木工学科の澤野利章先生が、生産工学部長に就任されました。ここに報告させていただきます。ここに「ご報告させていただきます」と共に、「ご多忙のところ会報に原稿をお寄せいただきましたので、ご紹介させていただきます。」

生産工学部学部長 澤野利章

令和四年二月一日から生産工学部学部長並びに生産工学部研究科長を仰せつかりました。

前学部長の体調不良による突然の辞任という形での就任

にはなりませんが、前々学部長、現土木工学科特任教授の落合先生を引き継いで前学部長の清水先生がやるうとしていたことをさらに踏襲し、それらの完成を目指していきたいと思っております。また今後はリベラルアーツに特化した新たな取り組みを考えています。

一方で昨年、本学が起こした一連の不祥事は大変ご心配をおかけいたしました。皆さま方から信頼いただける大学となるよう改革を進めております。引き続きのご協力と、変わらぬご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

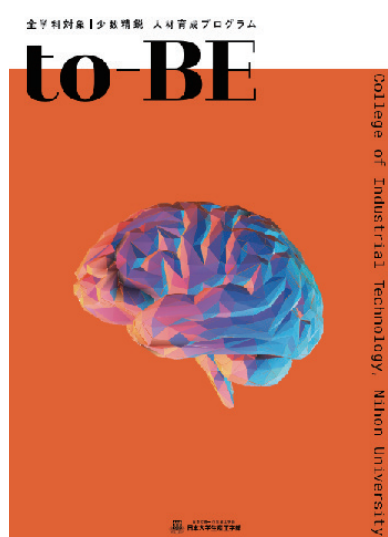
さて生産工学部の強みは何といつても生産工学系科目という体系化された科目群を有していることです。これらの生産工学系科目は他大学にもあ

るかもしれませんが、キャリア演習や生産実習（インターンシップ）、プロジェクト実習など地域と連携した科目が群としてあり、一般教養と専門科目を一緒にしたものは本学部だけではないでしょうか。海外での生産実習も準備しておりますが、今後は新型コロナウイルス感染症拡大が落ち着いたら募集を再開する予定です。

また学科の枠を超えた教育プログラムも特徴のひとつといえます。最初に立ち上げた「Glo-BE」はグローバルビジネスエンジニアリングと呼ばれるもので、国際的に活躍できる人材を育成しています。次に「Entre-t

o-BE」は事業継承者、起業家育成プログラムです。ちばぎん総合研究所と連携し、商売にかかわる法律・理論や

手法などを学んでいます。三つ目は「Robo-BE」です。ロボット技術を中心に学ぶプログラムです。ロボットに触れたり作るだけではなく、企画なども行います。四つ目の「STEAMto-BE」は工学に創造的な視点を盛り込んで商品化していくプログラムになります。いずれのプログラム受講者も三十名から八十名程度の学生数で実施しており、プログラム修了者の学修成果は目を見張るものがあります。



学科の枠を超えた教育プログラム

さらに詳しい情報は生産工学部ホームページ内の「少数精鋭スペシャルプログラム(4BE)」をご覧ください。

Glo-BE Robo-BE Entre-to-Be STEAM-to-BE

興味ある方はこちらからどうぞ！

「自らの言葉で考えながら行動する」に基づいています。押し付けられてやるのではなく自分たちで興味のあることを早く見つけ、より深く学び、

さらには今年度より新たに企業支援プログラムを立ち上げました。日本大学生産工学部

から学生起業家を輩出することを目指し、起業の熱意のある学生を少数精鋭で選抜し、本気で支援するプログラムです。単位等の認定は行いませ

目標を見つけて行動する、できるようになる教育を目指してまいりますので、引き続き学生へのご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

土木系三学部四学科 主任教授 挨拶

毎号恒例となりましたが、本学土木系三学部四学科(理工学部土木工学科、同交通システム工学科、工学部土木工学科、生産工学部土木工学科)の主任教授の先生方より、本会会員向けに挨拶文をいただきましたので、ご紹介させていただきます。



理工学部土木工学科 主任 梅村 靖弘

昨年から主任教授が変更になりましたのは、生産工学部土木工学科・佐藤克己先生であります。その他の二学部三学科の主任は昨年引き続き務められております。なお、各学科へは毎年本会より『教育補助費』として皆様からお支払いいただいた会費から各学科へ支援金として贈呈しており、学生の支援等に役立てていただいております。

了、学部215名が卒業いたしました。就職先の業種別の主な内訳は、公務員54名(21%)、建設業107名(43%)、コンサルタン

る沿道植生環境の評価指標の検討」

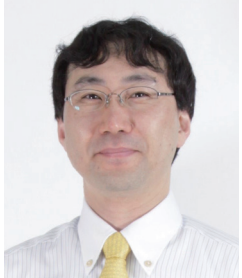
このような奨励賞のおかげをもちまして大学院生の研究活動におけるモチベーションも高く維持されており、昨年も学協会等で優秀発表賞を受賞するなど活躍しております。あらためて御礼申し上げます。次第です。

教員組織の面では、この令和4年3月末をもって、特任教授の岸井隆幸先生(都市計画)が退職されました。また、この4月に助手の佐藤柳

言先生(水理学)、中村勝哉先生(地盤力学)が再任用(任3年)されました。

4月より、コロナウイルス感染防止のため2年に亘り続いた対面授業の制限も撤廃され、全面的な対面授業が再開されました。5月現在、散発的にコロナウイルスに罹患した学生が出ておりますが、クラスターは発生しておりません。このまま前期日程が終了されるように感染予防への対策を怠らないように教員一同努めていく所存です。皆様方のご健勝を祈念しますとともに、今後ともご支援をいただきますようお願い申し上げます。次第です。

理工学部
交通システム工学科
主任 小早川 悟



日大土木会の皆様方には、日頃より交通システム工学科の教育研究活動ならびに学生へのご支援をいただき、御礼申し上げます。

交通システム工学科の教室の動きですが、鈴木圭教授が、令和4年3月をもって定年退職されました。鈴木教授は、平成29年4月に民間企業から本学科に着任され、約5年間に渡り、本学の教育研究活動にご協力いただきました。また、令和4年4月より、新しく関口穂氏を助手としてお迎えすることになりました。関口助手は、昨年度に着任された谷口望教授の研究室で、鉄道工学や鋼・複合構造に関する研究を行っていただく予定です。

学生の卒業や就職状況につきましては、本年3月に、修士課程18名、学部生117

名の修了生・卒業生を送り出すことができました。また、就職に関しても前年度と同様に、民間、公務員、進学を合わせて就職希望者の就職率は100%となっております。これも、日大土木会をはじめとして多くの皆様方のご支援の賜物と感謝いたしております。

新入生については、本年4月には126名の新しい学生を迎え入れることができました。昨年度の入学数は学科学定員の120名よりも少ない入学者となっておりますが、本年度については学科学定員数よりも多い新入生を迎えられることができ、学科としても活気が出てきました。さらに、授業については、昨年度まではコロナ禍による制限がある中での実施となっておりますが、本年度からはコロナ禍以前の授業に戻っております。大学院生も含めた全ての学年で学科全員の入構が可能となり、授業も多くの科目が対面で実施されています。マスクの着用や飲食を伴う懇親会の制限等は残っておりますが、大学キャンパスでは以前のように多くの学生が勉学や研究に励む姿を見ることが

ができるようになりました。昨年度の大きな出来事としては、本学科の研究室や実験室が使用している船舶校舎7号館の耐震工事が実施されました。学科事務室や実験演習室ならびに全ての研究室が令和3年9月に日大習志野高校の旧校舎に一時的に引越して、耐震工事が終了した令和4年3月に戻ってきました。半年の間に2度の引越しを行うことは大変な作業でしたが、研究室の片付けを行うよい機会にもなりました。耐震工事により補強材が入った研究室は、以前と比べて若干狭くなりましたが、外見はほとんど変わっておりません。船舶校舎にお越しの際には、お立ち寄りいただけると幸いです。

工学部土木工学科
主任 仙頭 紀明



工学部土木工学科並びに土木工学専攻の主任を務めております仙頭でございます。日大土木会の会員の皆様をはじめ、多くの校友の皆様方には、工学部土木工学科の教育研究活動、並びに学生の修学・就職支援に多大なご支援・指導を頂いておりますことに、心より厚くお礼申し上げます。

さて、工学部土木工学科の近況についてご報告させていただきます。入試状況につきましては、今年より学科の入学定員が10名増えて一六〇名となりましたが、一連の不祥事の影響もあり、一般入試では苦戦を強いられたものの、定員を少し下回る一五五名(内女子一〇名)の新入生が入学しました。

令和三年度の就職状況は、

校友の皆様方のご支援もあり非常に好調で、就職一〇〇%を一〇年連続で達成しました。工学部卒業の新人が先輩方の職場に配属されることもあるかと思っております。その節はご指導賜りますようお願い申し上げます。人事関係では、入学定員増により教員も一名増員されて専任教員十六名体制となりました。四月より、阿部慶太先生を鉄道総合技術研究所より准教授としてお迎えしまし

た。先生のご専門は地盤災害軽減であります。また、土木工学科を退職された中村玄正先生(日本大学名誉教授)におかれましては、長年の教育研究に対する功勞により、瑞宝小綬章を受章されました。十二月には「猪苗代湖の水環境保全活動について」と題して叙勲受賞記念講演を開催し、多くの卒業生と学生が参加し、しい猪苗代湖の実現に向けた先生の今も変わらぬ熱い情熱を感じることに



写真 土木女子の会も活動再開！ (工学部)

ができました。

さて、今年度は感染拡大防止に配慮しながらも、昨年度と比べ、大幅に対面形式の授業を増やしたことで、コロナ禍前の大学らしい活気ある雰囲気に戻ってきました。オンライン会議、在宅勤務といった新しい働き方が定着しましたが、こと教育に関しては、対面で実施することが最善であるという思いを強くしております。

昨年度紹介した「ロハスの池プロジェクト」(代表・手塚公裕准教授)では、近隣の古川池を対象として、大学、地域住民、行政が治水・利水・環境保全の課題に協働して取り組んでおります (https://www.ce.nihon-u.ac.jp/newsinfo/令和三年度『ロハスの池プロジェクト』の報告会)。コロナ禍の中、思うように活動できなかった「土木女子の会」も活動を再開しました(写真)。学生間の相互の親睦に加え、現場見学会や福島県内で働く女性技術者との交流等の企画を検討しています。

最後になりますが、コロナ禍の早期の収束と皆様のご健康を心より祈念いたします

生産工学部土木工学科 主任 佐藤克己



本年4月から、生産工学部土木工学科主任を仰せつかりました佐藤です。平素より日大土木会の皆様方には、ご支援をいただき誠にありがとうございます。また毎年、教育支援費をいただいております。この場をお借りして御礼申し上げます。

さて、最初に卒業生と新入生の状況を報告いたします。令和三年度の学位記伝達式では、学部生206名、大学院生11名を送り出すことができました。就職先の内訳は施工会社が46%、建設コンサルタントが25%、公務員が12%、進学が7%であり、おかげさまで例年と同様に就職率は100%でした。一方で、ここ数年、民間企業の業績好調による積極的な人材獲得の影響から公務員や進学の低調が見受けられており、学

科として大学院の魅力発信を進めているところです。

次に、令和4年度の新入生は213名であり、女子学生は21名です。大学院への進学者は、博士前期課程が14名、後期課程が2名です。

学科の近況としましては、まず令和4年2月1日付で本学部の澤野利章先生が生産工学部長に就任されており、また、令和4年度に野口博之先生が助教に昇格されました。

教育面では、平成14年度から始まったJABBE認定プログラムは、当初は学生が認定か非認定プログラムかを選択できるコース制としていましたが、今年度の1年生からは、入学者全員をJABBE認定プログラムに受け入れ、より良い学修環境を学生に提供していきます。

さて、4月からソーシャルディスタンスを確保しながら、対面授業を展開しています。と同時に濃厚接触者に指定された学生などを対象としたオンライン授業も併用しています。私も教員も久しぶりに多くの学生を前にして授業ができる喜びを感じながら、日々慌ただしく過ごして

いるところです。1年生は、3年ぶりに学外で日帰りのオリエンテーションを実施しました。東京晴海の乗船場から屋形船2隻を使って、隅田川、お台場、運河などを巡り、土木関連のクイズや隅田川に架かる橋を下から見学して、土木建造物の優雅さや機能を学びました。

研究活動では、佐藤、高橋先生、森田先生、そして環境安全工学科の保坂先生らの共同研究が日本下水道協会から奨励論文賞を受賞、また加納先生、加納研究室の大学院生、土木研究所の共同研究が日本道路協会から口頭発表論文優秀賞を受賞されました。今後とも学会などで活躍できるように、大学院生とも日々研鑽してまいります。

最後になりますが、日大土木会の今後のますますのご発展をお祈りするとともに、引き続き日大土木会の皆様のご指導・鞭撻のほどよろしくお願いたします

「微生物類によくやった!」
乙幡 雄介

日大土木会奨励賞 受賞からの喜びの声 (理工・土木)

理工学部土木工学科(大学院理工学研究科土木工学専攻)では、日大土木会からの教育補助費を平成二十年より「日大土木会奨励賞」として大学院生の表彰に使用させていただいております。梅村主任教授の挨拶にも書かれておりますとおり、修士論文の最終発表会において教員の採点によってその選考がされております。

「2つの視点で学んだ」
金野 湊太

今回の日大土木会奨励賞の受賞にあたって、3年間ご指導いただいた齋藤利晃教授、小沼晋准教授、吉田征史准教授、修士2年から1年間ご指

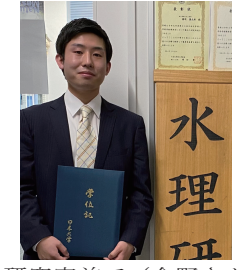


指導の齋藤先生と(乙幡さん)

導いただいた藤井大地助手、さらに同期の池ヶ谷祥吾君へ心より感謝申し上げます。

大学院を振り返ると、私の研究は教員の皆様からのアドバイスや指摘を元に、自由奔放な微生物類の生態を理解していく作業の繰り返しでした。とても手がかる子でしたが受賞できた今、微生物類には「よくやった」と伝えたいと思います。今後は土木技術者として、研究活動で得た経験や知識、私の持つ行動力を活かして精進して参ります。最後に、本研究に携わった全ての皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

実験を通じた知見を現場でどう活かす、実現するかが大事である、ということ。土木工学とは、人の役に立てこそだと考えたからです。このことに気付けたのは、担当教員である安田先生に色々な現場に連れて行っていただいたことで、現場と実験の2つの視点を学ぶことができたからだと思います。付随して、「現場」という観点から研究を見直し課題点や適応範囲を考え取り組んだことが、奨励賞に繋がったと感じています。私はまだ未熟者ではありますが、研究を通じて学んだことを意識し続け、社会貢献やお世話になった先生方に恩返しできるよう4月から社会人として努めていこうと思っております。



研究室前で(金野さん)

「充実した2年間」

榎崎 慎太郎



「コロナ渦での大学院生活でしたが、先生方や事務員の方、素敵な同期や先輩後輩に支えられて、非常に充実した2年間を過ごすことができました。日大土木会奨励賞を受賞するにあたり、私に関わる全ての方々へ心から感謝を申し上げます。6年前、田舎から上京して、右も左もわからなかったあの頃から、大きく成長できた学生生活でした。社会人になってからも、日大土木の修了生としての誇りを忘れず、社会に貢献できるよう精進します。」



研究室前で（榎崎さん）

「苦しかった2年間」

平井 聡雄



この度は荣誉ある「日大土木会 奨励賞」をいただき、大変嬉しく思っております。大学院での研究生生活を振り返ると在宅での研究が多くを占め、学会発表での交流が少ないうちや現地調査になかなか行けなかったこと、研究室の後輩との交流の機会も少なかったりと、研究を含め思い通りに行かなくとも苦しい2年間でありました。そのようなかで、私が2年間行ってきた研究やそれをまとめた修士論文並びに審査会での発表を評価していただけたことは大変励みになります。この2年間は苦しかったですが、評価していただけたことも含め、日大理工土木で学んだことや研究生生活で身についたことを活かして、4月からの新生活人生活を邁進していきたいと思っております。

山田清臣 顧問
（本会初代会長）が
ご逝去



本会創立に尽力されました初代会長で日本大学名誉教授の山田清臣先生の訃報が入って参りましたので、慎んでお知らせさせていただきます。山田清臣先生は、昭和三十一年に本学工学部（現理工工学部）を卒業され、大学院を経て日本道路公団に就職、昭和三十七年に理工学部交通工学科（現交通システム工学科）の設立に加わり、その後土木工学部へ移籍され、教室主任、学生担当さらには本学学生部長として活躍なさいました。平成二十四年には春の叙勲にて、瑞宝小綬章を受けられております。平成十二年に故松田慎一郎氏、森元峯夫氏、村田恒雄氏、竹澤三雄先生らと共に本会「日大土木会」を設立され、初代会長にご就任されまし

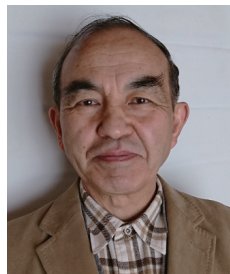
た。

また、本会報の表紙の題字（日大土木会）についても山田清臣先生の書によるものであります。

数多い教え子の中で、本会で活動している「地盤の会」の会長も務めていただきました佐々木勉さん（昭和五十一年大学院修了）に追悼の文を書いていただきましたので、ご紹介させていただきます。

「山田先生を偲んで」

佐々木 勉
（昭和五十一年院修了）



山田清臣先生の逝去の知らせを聞きしました。水泳で鍛えた屈強な身体を持ち主だと思っておりましたので残念でなりません。

先生との出会いは昭和四十七年ごろの土質力学の授業だと思えます。当時は、山道三先生がご健在で山田先

生は当山先生の研究室に同居していたように思います。自分は土質を深く知りたくも山田研究室を選びました。以来五十年弱にわたったのお付き合いになりました。

自分が就職する際は、山田先生の電話一本で就職できました。大変感謝しております。卒業後は、日大関連の集まりがある度に「おい、佐々木君、元気かい」と声をかけて頂き、常に励まして頂いておりました。山田研究室は先生発案の「桜駿 土の会」で卒業生が集まり、自分の仕事の報告と飲み会をやっていました。後に、この会は「地盤の会」となり、いまだに続いております。この会は諸先輩後輩の交流の場になっており日大生の繋がりの深さを象徴しております。

山田先生、親身なご指導と沢山の温かい思い出をありがとうございました。先生のご冥福を、心からお祈り申し上げます。



「故 山田先生の
お墓参りを終えて」

会田 和義
（平成九年院修了）



山田清臣日本大学名誉教授は、昨年の令和三年十二月二十五日に八十九年にわたる生涯を閉じられ永眠なされました。今年3月に、鎌尾彰司先生からいただいた突然の訃報に深い驚きと悲しみを感じました。

鎌尾先生及び大学院同期の石橋正光君らとともに当時の仲間へ声掛けをして、去る五月二十八日（土）にH8年卒からH11年卒の山田研究室OB総勢17名で、千葉県千葉市緑区にあるメモリアルパーク千葉東霊苑（区画番号・第4H6特20）へ山田先生のお墓参りに行って参りました。当日は天気も良く、各方面で活躍している教え子の姿に山田先生も笑顔で答えてくださっているように感じました。

大学及び大学院在籍当時、夕方になると研究室で山田先生は、来客の方、学生たちとお酒を飲み、笑顔で歓談していたことを今でも覚えております。その時「社会に大勢の先輩方が活躍されている日大土木は、その繋がりがこそ財産だと思う。君達も社会に出たら分かる。」とおっしゃって参りましたが、今回のお墓参りを含め、最近実感することが数多くあります。山田先生からいただいたご縁をこれからも大切にしていきたいと感じています。

山田先生のご冥福を心からお祈りいたします。合掌。



研究室OBで山田先生のお墓参りへ

野呂祐介氏 (UR職員) 学生への講演で 震災復興事例を講義

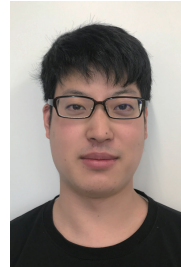
本年去る六月八日十六時 四十分からUR都市機構・職員 野呂祐介氏 (工学部・平成十一年卒) の講演が学生向けに開催されました。

本講演は、理工学部土木工学科の「災害管理」の授業の一環として実施されているものであり、URが取り組む復旧・復興にスポットを当て、野呂氏が取り組まれてきた経験に基づき講義していただきました。講義の詳細及び講師の感想等につきましては、次号の会報で報告させていただきます。ここでは、当日準備にて協力してくれた大学院2年生の石井建太郎さんに講義の感想をもらいましたので紹介させていただきます。



講師を務められた野呂氏

「特別講義で学んだこと」 大学院M2 石井建太郎



独立行政法人都市再生機構 東日本賃貸住宅本部の野呂祐介様に「UR都市機構の震災復興支援の取り組みについて」のご講演を聞かせていただきました。

東日本大震災復興支援では、被災市町の職員が不足特に技術者) しているなかで、ピーク時には460名ものUR都市再生機構の職員が派遣されておりました。南三陸町における復興支援の事例では、南三陸町の低地部は、土地画整理事業により約10mの高上げを行いました。それに伴い、整形な街区形成のための河川工事や国道の線形変更の工事など、国や県や市といった異なる事業者によって、同時並行で工事を進めることは困難であるため、その調整に苦労したとお話があり、興味深く聞くことができました。

また、低地部の高上げに必要な土砂量の見極め、土砂運搬ルートの確保といった問題等もあるとお聞きし、実務的な立場でお仕事をされている方ならではの話を聞かせていただけました。復興の裏にはUR都市機構と他の関係機関との細かい調整があり、そのためには「知識や技術力」はもちろん大切だが、協調性やコミュニケーション力こそが肝要である」との言葉が印象的でした。

山崎淳 理事 (本学名誉教授) が 瑞宝小綬章

本年春の叙勲の受賞者が内閣府から発表され、本会理事で本学名誉教授の山崎淳先生 (元 理工・土木教員) が、長年にわたる教育研究功勞により瑞宝小綬章を受章されました。



おめでとーございます。

奥山宏二氏 (都下水局長) 特別講演会に登壇

本年四月に東京都下水道局局長に就任された奥山宏二氏 (昭和六十年・本学理工学部駿河台校舎並びにオンラインにおいて開催されます。

当日は十五時から、総会の議案説明等も対面式及びオンラインで配信する予定であり、総会に引き続いて講演会が実施される予定であります。

奥山氏の講演のタイトルは、「東京の都市づくりにおける政策的な着眼点」となっております。小池百合子・東京都知事からも「都市インフラ整備に精通した奥山氏を下水道局長に登用した」



講演される奥山 都下水局長

とのコメントがあり、その活躍が期待されるところであります。また、奥山氏の講演に先立ち、土木系三学部四学科の主任教授の先生方からご挨拶も実施される予定であります。詳細につきましては、総会案内をご覧ください。

ホームページが再始動

しばらくの間閉鎖されておりました本会のホームページが、昨年十二月より新しくアドレスを取得し、再始動しました。新しいホームページアドレスとメールアドレスは以下のとおりです。

http://nichidai-dobokukai.com/ info@nichidai-dobokukai.com

内容につきましては、これから徐々にリニューアル作業を進めていく予定にしております。現在では、会報のバックナンバーを見ることができません。

本誌表紙のページや封筒にもアドレスが記載されており、一度ホームページにアクセスしてみてください。

計報

昨年の会報発行から本年六月現在までに事務局に届きました会員の皆さまの計報をこの場を借りて謹んでご報告させていただきます。

お亡くなりになられた方々の本会に対するこれまでのご協力並びにご支援に感謝しますと共に、謹んでご冥福をお祈りいたします。

青木伸光 (昭和四十六年生産・土木卒)

石井孝 (昭和四十八年工・土木卒)

菊地司郎 (昭和三十七年理工・土木卒)

奈須川光夫 (昭和三十一年理工・土木卒)

新谷洋二 (理工土木・教員・本会設立発起人)

三好敬直 (昭和三十四年理工土木卒)

山田清臣 (昭和三十一年理工土木卒)

五十音順 敬称略 本会初代会長

事務局より

会報第三十号も無事発行することができました。コロナ禍ではありますが、理工学部では手探り状況の中、対面授業が実施されており、キャンパス内も学生で賑わいを見せております。しかしながら感染者や濃厚接触者の情報も数多くあり、対面授業とオンライン授業を組み合わせた「ハイブリッド式」での授業がおこなわれております。

本会の通常総会においても、基本は書面審議としながらも、議案説明について対面及びオンラインで実施したハイブリッド式を一部取り入れる予定となっております。今後定着するかがとても興味があるところです。本会、並びに本会報へのご意見・ご要望等がありましたら、事務局までご連絡をお願いいたします。(S・K)

